

鳥類調査法

「バードウォッチング」という趣味の世界があるように、鳥類は一般に広く親しまれており、ほかの生物（例えば昆虫とか哺乳類とか）に比較すると、何となくクリーンなイメージもあって、みなさんにもあまり抵抗なく入っていける世界なのではないでしょうか？



しかし、我々が普段やっている鳥類の調査というのは、そんなに生やさしい世界ばかりでもないのです。今回はその一端についてお話ししてみたいと思います。

さて、鳥類を他の生物と比較した場合に、際だった大きな特徴があります。一つは「飛ぶ」ということ、もう一つは「鳴く」ということです。このため鳥の調査方法にはほかの生物とは違った様々な調査手法が発達しています。その中でも特に鳥の調査で特徴的な手法としては、鳴き声を聞き分けて種類や数を知る手法が多いということがあげられます。

【鳴き声を征するものは鳥を征す？】

基本的に、鳥は1種1種鳴き声が違い



ます。また、さえずり（主に繁殖期になわばり宣言や求愛のために発声する声）と地鳴き（さえずり以外の声）があり、季節や雄雌

で声が違います。また、中には姿を見てもなかなか識別できないのに鳴き声を聞けば簡単に識別できるなんていう鳥もいます。その違いを一つ一つ覚えていくのが「鳥屋」（鳥類調査者のこと）としての第一歩であり、普通にいる鳥なら鳴き声（それも地鳴き）で全部識別できるようになれば、とりあえず合格と言えるでしょう。

また、耳がいいというのも鳥屋としての大切な条件で、遠く離れた鳥の鳴き声をいかに聞き分けられるかというのが調査結果に如実に反映されます。だから我々鳥屋が野山を歩くときは、いつも耳をダンボにして歩いているのです。また、鳥やさんの中には、普段から難聴になりやすいヘッドホンステレオを使わないとか、音楽を聴く時もボリュームを上げすぎないといった気配りをしている人もいます。

【時にはじっと待つことも】

ワシやタカなどの猛禽類は滅多に見られるものではありません。でも見ようと思えば見ることができるのです。なぜなら、彼らが営巣する条件、採餌場所となる条件、上昇気流を捕らえる



地形の条件といったものを考えて絞り込むことによって、彼らが出現しそうな場所というのが自ずとわかってきます。後はウロウロしないでじっと腰を据えて観察することによって鳥の方から飛んできてくれるのです。

【もちろん探索も大事】

ただじっと待つばかりじゃ能がありません。鳥によっては鳴きもしなければ、滅多に飛び立たないという陰気な奴もいるので、時には探索することも大事です。また小鳥の間もじっと待っていても向こうからやって来ることは少ないので、こっちから探しに行かなければなりません。そのほか、鳥を直接見つけること以外にも、落ちていた羽や食痕などを手がかりにして、種類がわかるということも意外に多いものです。

【カワセミを探すには

カワセミになりきる！】



それでもお目当ての鳥が見つけれない時はどうすればいいのでしょうか？

例えばカワセミという鳥を探すとします。カワセミは水辺にすむスズメ位の大きさの青い鳥で、水中に飛び込んで小魚を捕らえます。このカワセミを探す時には採餌場所となる水辺か、繁殖場所となる崖のような場所を探します。後は、カワセミになりきる事が大事です。「あその水面に張り出した枝の下には手頃な大きさのタモロコがいる」とか、「この崖はオーバーハングしていて雨水を防ぐのに具合が良さそう」なんて思っていると「ツイーツ」というカワセミの独特の鳴き声が聞こえてくるのです。

【あとは経験とセンスの問題】

仕事柄、いろんな鳥屋さんと一緒に調査をすることがありますが、同じ場所を同じように歩きながら、どうしてもこの人には勝てないという人がいます。鳥の識別能力には差がなくとも、

ワタシが40種見つけるのに41種見つけてくるのです。きっとキャリアやセンスの違いがこの1種の差に表れるのだと思います。また知り合いの鳥屋にいるんな鳥の鳴き声とそっくりの声を出せる人もいます。実際にフクロウが

彼の声に反応して寄って来るのを見たこともあります。はっきり言って神業というかヘンタイの世界です。そういう特殊なワザを持つに至るまでには彼もまたきっと多くのキャリアを積んだに違いないのです。

今回はざっと鳥類調査の概念的なことをお話しましたが、この他に、鳥類調査の方法論として確立された手法がたくさんあります。それぞれの手法についてはまた改めて次回以降に書いてみたいと思います。

(本社自然環境調査室・浅尾勝彦)

